

第1回東北復興シンポジウム

[報告] 文責：山口琴子

日時 2011年12月22日(木) 10:00~15:00
会場 ホテルあえりあ遠野(岩手県遠野市)
参加者 約370名
主催 NPO 法人アスクネイチャー・ジャパン、遠野市

(1) トークセッション「海やまのあいだに生きる」

山折哲雄 宗教学者
赤坂憲雄 福島県立博物館館長、学習院大学教授
川勝平太 静岡県知事
安田喜憲 国際日本文化研究センター教授

(2) 後方支援の報告 遠野市

(3) パネルディスカッション「東北復興の道」

コーディネーター 山折哲雄
パネリスト 本田敏秋 遠野市長
碓川豊 大槌町長
赤坂憲雄、川勝平太、安田喜憲、仁連孝昭

<地震と津波の質>

地震と津波の災害では質が異なる。地震は予知することができない。宗教的な性格をもつといえる。日本人は非宗教的だ、無宗教的だと自他認めるようになってきているが、そんなことはない。地震と何千年とつきあってきた。

津波は地震が発生してから起こるから予測ができる。いかに行動するかで被害を防ぐことができる。津波とつきあってきた日本人が道徳的、倫理的でないということは決してない。

復興計画が東京から発信されている。東北の復興になるわけがない。海やまのあいだに生き続けてきた東北の人々の歴史をどう考えているのか。

<三陸の漁村>

震災後、三陸の村で「これ以上ここに住めない」とコミュニティを解体した村があった。これは報道されていない。

昔、津波により壊滅した漁村が10年もすれば元通りになった。それは漁業の仕事があり、若者や子どもがたくさん働くことができたから。多くの人に移住し、数年で村をつくることができた。少子高齢化社会の今回は同じシナリオは成り立たないと想像している。

震災後、海岸線を歩いた。海岸線が後退していた。泥に浸かった場所がある。昔の地図を見ると明治30年代までそこは浦だった。潟だった。

そこを明治30年代に水田に変え、さらに近代、水田をつぶして町にした。今回、潟を水田に変えたところがそのまま泥に埋まっていた。2千年の歴史に対して、とりわけ近代の開発のあり方に対して、批判というか反省を促しているのではないか。近代は、技術と富によって、自然の懐に深く深く入りすぎた。

<東北の自然観>

海と山との間に生きていた、自然観をもう一度取り戻さなければならない。学ぶべきテキストは、外ではなくて、我々の中に、自らを作り上げている風土の中にある。

生きとし生けるものが皆ことごとく救われるというのが平泉中尊寺の思想。

最も多くの多様な生きものがいるのはどこか。森だ。その森はこの日本においてどこにあるか。北海道、東北にある。地球の聖地です。東京から福島に入るときトンネルに入る。森に入るのである。

このシンポジウムをきっかけに遠野物語をベースにしてこの遠野から文化を発信していく、今日はいいい日になるのではないか。今日は冬至、明日から少しずつ日が長くなる。

第1回東北復興シンポジウム

<生命の文明>

学生のころ、東北のブナの森に命を救われた。美しいブナの森を見て、こんなすばらしい世界が世の中にあるのか、と生きる力を与えられた。

世界が東北のみなさんに注目している。みなさんが心に思われることを、腑に落ちることを、そのままやっていただければいいと思う。何も新しいことする必要はない。

私たちはこれまで物質エネルギー文明、欧米の文明に憧れてきた。それが原子力。このまま欲に、利権に、お金にまみれて生きていくのは限界がある。日本から新しい文明の時代をつくりなさいと天が言っているのかもしれない。東北は助けられる側じゃない、学ばれる側になっている。

大槌町はイトヨという魚が生きている。今、町がなくなってもイトヨは生きている。ほんの40年前まで日本のどこでもイトヨはいたが今はここにしかない。生きとし生けるものを等しく大切にす、東北の生命文明をいかに広めるか。東北の人が人類を救う。東北がだめになったら人類はだめになる。

<地域の絆>

田老町では、世界一安全と言われた防潮堤が破壊された。自然の猛威はすごい力なのだ。人間の非力を踏まえたと、自然とどう向き合い共生するか。高台移転と一言でいうけども、場所も確保できない状況です。希望を絶望にしてはならない。

視察に来られた要人から「遠野市長は遠野の市長ですよ。そんなに支援をして何か得があるのですか?」と聞かれた。そういうものの考え方は地域の絆がどこかに置き忘れていてではないか。それから「遠野の人はすごい」という言葉があった。そういうものではない。

<復興への道と現状>

大槌町では今なお505名の方々が行方不明となっている。

大槌町は海と深くかかわって暮らしてきた町。防潮堤という塀の中では住みたくない。「海が見える、つい散歩したくなる美しい町」にしたい。

復興計画は住民合意が大事。自分たちの集落をどうするか、住民が当事者意識で議論をした。それは亀さんのように遅くともおそらくウサギに追いつくのではないか。

高台移転はやむを得ない。しかし盛土をして上下水道をかさ上げしないとイケない。インフラ整備、区画整理が必要。職員が何人いても足りない。

<自然災害と共に>

自然災害は避けることができない。東南アジアの例。焼畑をしながらも、森を残している村は、災害があっても食いつなぐことができるので生き残る。

しかし効率だけ考えて森をすべて焼畑にしてしまうと、山火事など災害のとき、食べるものがなくなる。

<津波てんでんこ>

「津波てんでんこ」を文科省が防災教育の一環として取り上げられることを決定したようです。教え方によっては良くないことになると思う。民族的に伝承されてきた知恵は、その村の倫理的規範と深く結びついている。機械的に適用されてよいのか。

一度避難した方が、お年寄りを助けに行ったらたくさん亡くなっている。「迎えに降りない」ことが大事になる。災害の記憶は風化します。風化させない取組みをしたい。

碓川町長がお母さんから教えられたてんでんこは「いざとなったら私を捨てて逃げていいんだよ」という究極の教えだと思う。家族を守れなくて、自分だけが生き残って、自分を責め続けている人がたくさんいる。東北の人は自分を犠牲にしても人を助けようという人たちだから、「自分だけが生き残っても、仕方ないんだよ」ということだと思う。

第1回東北復興シンポジウム

<ししおどり>

南三陸町の漁村のししおどりはまさに海やまのあいだ。山をきれいにすることが漁場を守ることだと知っている。震災後、復活したししおどりを見て、避難所の人が、生き残った自分を初めて許す気になれた、という。そのししおどりは「生きとし生けるものの供養のためにこの芸能を神に捧げる」ものだという。津波で亡くなった、魚の供養塔と人の供養塔が隣り合っている。これは平泉の思想でもある。

震災を通して、私たちは生と死を考えてきた。つながりがいかに大事かということを被災地の方が示してくれた。もう一つ、生き残った人と亡くなった人との重要な絆、魂をとおして絆がつながったとき、はじめて東北復興の自立の足場ができたのだと思います。そのことを先祖達は千年の昔から気が付いていたと思います。鎮魂の詩は海と山がテーマになっている。やはり人間は依然として海と山の間に生きている。